

The Piccadilly Puzzle and Other Stories  
2017  
by Fergus Hume

目次

ピカデリーパズル 5

緑玉の神様と株式仲買人 195

幽霊の手触り 223

紅蓮のダンサー 245

小人が棲む室 273

編者解説 457



ピカデリーパズル

——チャールズ・ウィルビー殿へ献呈

## 第1章 霧深い夜

八月の深夜二時に、パークレーンの、煌々と灯が点った屋敷から音楽が流れてくるのが聞こえた。カーストーク伯爵夫人主催の舞踏会だ。そう、社交シーズンはどうに終わり、ロンドン社交界メンバ―の大半は暖かい気候を求めて燕のように南欧へ出駆けていたが、舞踏会を開けるくらいの人数は街に残っており、セレブが多数列席していた。

戸外は、黄ばんだ濃い霧が空中に漂い、鬱陶しくて薄ら寒かった。ところが、舞踏会の大会場の中に入ると、ランプの輝く光と、おびただしい数の鮮やかな花々と、華やかに着飾ったご婦人方のドレスによって、まるでお伽の国であった。オーケストラは、スクリーン代わりに並べた、豪華な熱帯植物の鉢植えの背後で、最新のワルツ「わが友よ」を演奏していた。溜息をつくような、すすり泣くような旋律が部屋じゅうに忍び寄り、それは、ダンスをする人たちが磨き立てた床を滑るように踊るにつれて、人々に官能的な感情を吹き込んでゆくように思えた。女物のドレスの柔らかな衣擦れの音が、若い娘たちの軽い笑い声とパートナーたちがささやく内緒話の声に絡み合っていた。その間すべてを支配していたのは、奇妙な転調を伴って官能的な感情へと誘う、あの哀切な忘れ得ぬ旋律だった。

舞踏会場の入口ドアの傍に、三十歳くらいの若い男がもの憂い態度で壁にもたれ、ダンスをする人々が回転しながら前を通り過ぎるのを所在なげに眺めていた。だが、何かで頭が一杯といった顔の

表情からすると、明らかに心そこにあらずだった。男は背が高く、黒い髪で、顎ひげは短く整えられ、黒い目は射抜くように鋭く、口は固く噛み締められていた。浅黒い肌の色と、独特の縮れ気味にカールした髪から判断して、ある程度黒人の血が流れていることは明らかだった。突然肩を叩かれて彼は瞑想から覚めた。視線を上げると前に、白髪、赤ら顔で、顔つきがギリシア神話のシレノスのような外観の、太った年配の紳士がいた。

若い方は、西インド諸島の裕福な農園主の独り息子のスペンサー・エラズビー、年配の方はホーレス・マートンで、名だたる社交界人士で、普通は「タウンクライアー（お触れを触れ歩く役人）」と呼ばれていた——現在進行中のスキャンダルは全部知っていて、念入りに潤色した上でお仲間（お触れを触れ歩く役人）に小出しに垂れ流していたからである。

「へイ、エラズビー坊ちゃん」タウンクライアーが最新情報を取ってやろうという態度まるだしで言った。「またまたイギリスの家庭と美人のところへ戻ってきたってわけかい？　へイ。世界中どこもかしこも行ったんだろ？　へイ。旅行記をだすんだろ、へイ？」

「おれは違うね」エラズビーが、いつものゆっくりと物憂い調子で答えた。「近頃じゃ六マイル旅をすれば、途方もない題をつけて旅行記を出版しやがる。おれは将来、そんなことをしなかったことで評判になりたいね」

「新天地を拓かなかったのかい、へイ？」

「全然」と冷淡に。「おれにはコロンブスみたいな本能の持ち合わせはないんでね。古い大地だけで十分なのさ、おれは。アフリカは表面だけなぞって終わりだ。わが従兄弟たちの国アメリカを訪問した。オーストラリアの従兄弟たちにも同じく挨拶だけ。じっさい、普通のことをして、普通の結果を

得た」

「ヘイ！ どういうことだい？」

「倦怠感さ——おれはある程度ヴォルテールに同感だ、『この世界があらゆる可能的世界のうちで最も良いものだ』(ライブニッツの言葉。ヴォルテール『カンティード』では「この最善なる可  
能世界においては、あらゆる物事はみな最善である」という形で風刺される)」つてなると、人は少しばかり世界に倦きてくる。ところで、おれはあなたの好奇心を満足させたんだから、今お返しを貰うぜ。二年もイギリスにいなかったんで、ここの社交界のことが分からなくなってるんだ。ぶちまけて、洗い浚い話してくれ——スキヤンダル、ご逝去、ご成婚、ご離婚、要するに今評判のゴシップ全部を」

これはタウンクライアーの意になかった気晴らしだった。そこで、彼は長々と説明を始めた——愚行と流行には訓戒を交えて脚色し、スキヤンダルにはちよつとばかり悪意を込めた味付けをして、その結果、非常に愉快な談話になった。エラズビーは唇に静かな微笑を浮かべて、黙って聞き入っていた。ときどき特別おいしそうなニュースになると必ず声を上げていた。

「あなたは回想録を書くべきだよ。マートンさん」と素つ気なく言った。「書いたら、ゴシップじゃピープス(サミュエル・ピープス、日記作者 1633-1703)に負けないし、スキヤンダルじゃド・グラモン(コント・フィリベール・グラモ  
ン、フランスの廷臣 1621-1707)に負けない。面白さじゃ両方に負けない。しかし、まア続けてくれ——ほかに何か？ 新しくデビューした美人は？」

「ヘイ！ おつ、そうだった。今夜一人ここにいたんだ。レディー・バルスコムさ」

「何だつて！ バルスコム老が結婚したつて」エラズビーが驚いたという口調で言った。「あの人は自分自身を愛することしかしない人だと思っていたよ。そうなんだ！ それで、奥方は誰なんだ？」

「知りたいことは皆おなじだな」マートンの答えに熱がこもっていた。「あの御仁、どこか田舎の方

で彼女を拾ったんだ。彼女には家柄もなく、財産もなく、才気もなく——本人の美貌以外なものもない」

「それがありや、ほかの全部をまとめた値打ちがある——女にとっては」エラズビーがシニカルに口を挿んだ。「どんな女だ？」

タウンクライアーは、競売人のような解説を即座に口にした。「背が高く、金髪で、目は碧く、美しい白い肌、とびきりの体つき、そして悪魔そのものの気性」

「結構な資格のオンパレードだな。特に最後のが」エラズビーが呟いた。「バルスコムは気に入ってるのか？」

「へい！ そうなんだ、気も違わんばかりにな！ 目が届かないところには出したがらないくらいにね。ただ、今夜は一人で出すしかなかったんだ。パークシャーの所領で仕事があつて来られない。夫人も一緒に連れて行くとうとして、ここのダンスのせいで断られたんだ。おいおい、この季節にダンスって想像がつくかい！ ただまあ、カーストークの奥方は少タイカレてるからな！」

「レディー・バルスコムは亭主の愛情に同じくらい報いているんかい？」

マートンは眉を上げて、両手をこすり合わせ、意味あり気に目配せした。

「そうなつちやいないな、へい！ くすくす笑いながら答えた。「第一のご鼻根はカリストンさ」

「えっ！ 二股かよ——カリストンは、老バルスコムが後見人をしてるミス・ペンフォールドと恋愛中かと思つてたよ」

「バルスコムの被後見人とも恋愛中さ——あいつは腕が落ちないように、バルスコムの夫人の方とも愛をはぐくんでのさ。オレは離婚裁判まで行つても驚かないね」

「まア、あなたの推測はたいてい当たるからな」エラズビーが言い返した。「だけど、ミス・ペンフ  
オールドはどう言うだろうか？」

「ヘイ！ おっ、彼女は喜ぶだろうよ」がマートンの答えだった。「あいにく、彼女にとっちゃ、カ  
リストンの全部をもつてしても、マイルズ・デズモンドの小っちゃな小指ほども気にならないんだ  
よ」

「おい、おれもマイルズなら知ってるぜ」エラズビーが即座に言った。「すごく良い奴だ。ケンブリ  
ッジで一緒だったが、なんかウマが合わなくてね——筆一本で財をなそうとしてるって聞いたが」

「そのとおり！ 今のところ一ペンスも儲けちゃいない。そこで従兄弟のカリストン卿の秘書をやっ  
てる——マイルズは爵位継承順位じゃ次席さ、ヘイ！」

「せいぜいチャンスは大きかろうよ」エラズビーは軽蔑したように言った。「カリストンが結婚して  
嗣子を授かるのは確実だ、その前に飲み過ぎで死んじまえば別だが。ところで最初の話に戻ろうや。  
バルスコム一家は少しばかり混乱してるようだな」

「ヘイ！ 混乱というより、すつきりしてる。こういう風だ」マートンの説明に熱が入った。「バル  
スコムは妻のことでカリストンに嫉妬している。レディ・バルスコムはカリストンのことでミス・ペ  
ンフィールドに嫉妬している。この娘は、バルスコム、カリストンの二人なんかマイルズ・デズモン  
ドに比べりゃ気にもかけちゃいない」

「フランス劇の第二幕みたいだ」エラズビーはあくびをしながら呟いた。「まア、レディー・バルス  
コムを見たら、容姿についての意見をあなたにお伝えしよう。ところで、これだけ話をしたのに、あ  
んな素面だねエ。飲みにいこう」

「どこに泊まってるんだ？」サバルームへ行く時にマートンが尋ねた。

「ゲルフ・ホテルさ、ジャーミン街の」エラズビーが言った。「自分とこの部屋が片付く数日の間だけだがな。おれは大量にいろんなものを持ち帰ったんだ、屋敷の部屋はもう骨董店みたいになっちまってる。何を飲むね？」

「シャンペン」マートンが答えた。「おい、ちよつと言わせてもらおうか、君」相棒がブランデーをなみなみと注いだ小型のグラスを持って見ているのを見て、「この時間にそんなの飲むのはまずいぜ！へい、君は今夜まだ——」

「今夜はまだ飲んじやいないよ」エラズビーは苛々して遮った。「おれは今夜はこれ一杯だけだ。本調子じゃないんでね」

マートンはそれ以上何も言わなかった。しかし相棒と別れて、舞踏会場へと戻って出会った知り合いに言ったのは、気の毒なエラズビーは飲酒で自分をダメにするだろうということだった。

「ストレートのブランデーだぜ、君、へい！」と老社交界ゴロは言った。「この頃の若い連中は海外で悪習に染まってくる、へい！ 奴ら疲れ切ってるだろう、いやはやまったく！ 女の子<sup>キキル</sup>まで加わって、君、へい！ おいシヨックだぜ！」

明らかに、タウンクライアーは帰国した旅人に良い役を振ろうという気はなかった。

エラズビーは舞踏会に飽きてきたので、辞去の挨拶を女主人のところへ言いに行った。夫人は、奇妙な背の低い瘦せた女で、鬢をかぶり、胸が大きく開いたドレスを着て、おびただしい宝石で身を飾っていた——それは、ほとんど骨とダイアモンドで出来た生物という感じだった。

この怪人物に暇乞いをした後、エラズビーはコートを着て街路へ出ていった。タクシー馬車でホテ

ルへ乗りつけるか、徒歩にするか決めかねて、すこし立ち止まっていた。霧は非常に濃く、ガス灯は霧を通してぼんやりした黄色い星のように輝いていた。冷たい夜風は、最近までいた熱帯の気候に馴れきった若者の体に浸み入るようだった。

こんな時刻に徒歩でゆくことには明らかな不快さがあつたが、エラズビーは挑戦してみることにした。霧の中、ジャーミン街までの道を見出すことには何かパズルを解くのに似た愉しみがありそうに思えたのだ。霧の夜に、うすら寒い中を歩くことを愉しんでみるという風変わりな思いつきに微笑みながら、彼は葉巻に火をつけ、コートのボタンをとめて、パークレーンをピカデリーへ向かつて歩き始めた。

人が霧の国で経験する完全な孤立感には、妙な感覚がつきまとう——濃い黄色い霧はすべてを嫉妬深いベールに包み隠し——歩行者が、いわばたった一人で海を漂流しているような気持ちに陥るくらいに。四周を数百万の人口に囲まれているにもかかわらず、霧は同時並行でアラビアンナイトの魔法をかけられた都市のような孤立感を生むのである。

エラズビーはピカデリーへの道をなんとか見つけ、すぐ活発な歩き方で舗道に沿って威勢よく進んでいった。ときどき、不吉な顔つきをして襤褸をまとった輩が、不用心な旅人を持ち構えて突如霧から現れたものだが、エラズビーは放浪の民のような生活で神経が驚異的にとぎすまされておき、こういう夜盗の襲来に対する防衛の体勢は常時できていた。時おり、タクシー馬車がゆつくり通り過ぎる音を聞いた。馭者は通りなれた道用心深く馬を進めていた。それは、あたかも魔法のように急に非現実な出現をし、ピカデリーを茫漠として広大なロシアの草原ステップに似たものに変えていた。

耳はどんな音も聞き逃すまいとし、目は灰色の霧のベールの奥を見通そうとしていた。エラズビー

は、道に沿って急ぎ足で進んだり、何とか道を横切ったり、そして奇跡的な機敏さで（エラズビーはそれをすぐ自分の本能の賜物にしたが）セント・ジェームズ街へと曲った。ここで最初の不運に見舞われた。角を曲がったとたん、反対方向へすごい勢いで急ぐ若い男にぶつかった。

「すみません」相手はすぐに謝った。「霧が濃くて見えなかったもので、申し訳ありません」男が急いで立ち去ろうとした時、エラズビーは声の主が誰かわかって呼び止めた。

「ちょっと待て、デズモンド」陽気な声で言った。「旧友に言葉ぐらいかけたらどうだ」デズモンドは正体を知られて煩わしそうだ。そして相手の顔をじっくり見て驚きの声を上げたが、声はそう嬉しそうでもなかった。

「エラズビーじゃないか！」声にはためらいが感じられた。「君はベルシアかバタゴニアにいるんだと思ってたよ。こんな酷い夜にピカデリーで君に会うなんて誰にも予想できなかったよ」

「舞踏会に行ってたんだ」エラズビーは説明した。「それでホテルまで歩いて帰ろうと思ったんだ。ロンドンの霧と旧交をあつためようと思つてな。いかれた趣味だったが、面白かった。おれのホテルへ来て寝酒を一杯やろう」

「たいへんありがたいんだが無理なんだ。急用があつてね。どこに泊まつてるんだ？」

「ゲルフ・ホテルだ、ジャーミン街の」

「わかった」デズモンドは走り出しながら言った。「ジャーミン街だな。わかった、明日行く」

「ちょっと待ってくれ」エラズビーが引き止めて言った。「カリストンがどこにいるか教えてくれ。会いたいんだ」

「可能性は少ないぞ」デズモンドが首を振って答えた。「今夜、シヨアハムへ行っちゃまった——君も

知ってるヨット航海だ。アゾレス諸島へ行くつもりだ。それじゃ、明日会おう。おやすみ。ぼくはすぐく急いでいるんだ」

デズモンドは、エラズビーが知っている普段の彼に似ず、興奮状態で早口に話した。そして大急ぎで走り去り、霧に吞まれて見えなくなつた。エラズビーは静かに一笑いして、また歩き始めた。

「女だな、間違いない」道を中心して進みながら、心の中で呟いた。「こんな鬱陶しい夜に気まぐれなビーナスってわけか——女神を包むバラ色の霧なら魅力的だが、ロンドンの霧じゃあな、フン！」

彼は、さてジャーミン街へ行き当たるにはどうしたものかと舗道に立ち止まり、さあ運を天に任せ道を渡ろうとした時、突如、背の高い警官の姿が霧の中からぬつと現れて、明るいランタンの光でエラズビーを照らした。

「あつ、ちよつとよかつた、おまわりさん」助かつたという口調でエラズビーが言った。「この霧でちよつと迷つてね。それでゲルフ・ホテルへ案内してほしいんだ」

「道路を渡つたところでございますよ」警官はヘルメットをさわりながら返事をし、舗道を降りた。その後、エラズビーが続いた。

二人はすぐにジャーミン街に入り、左手側をそのままホテルに向かつた。まだ霧は深かつたが、エラズビーは見栄もあつて、もう自力で道がわかると思つた。警官に半クラウン金貨を渡し、二、三ヤード先へ進んで、そこからホテルの石段と思しきところを登つた。警官は、もし求められればいつでも案内役を務めるつもりで、同じ所に立ち止まっていた。その時、エラズビーの叫び声が聞こえてきよつとした。

若者は間違つた石段を登つてしまい、警官が駆けつけた時には、もうてっぺんにおり、足元には衣

服と思しき塊が見えた。

「おーい、おまわりさん」エラズビーが興奮した口調で言った。「ここに女が——死んでると思う」「きつと酔い潰れておるのですよ」警官は石段を登りながら、疑わしそくに返事した。

「そんなことはない。揺すつてみたけど、目を覚まさない。顔面が完全に冷いし、見てくれ！」警官は、職業柄の無感動状態からいくぶん覚めて、戸口に横たわっている女の上に光を当てた。女は、顔は色白で、髪は金髪、長いアザラシ皮のジャケットと絹のドレスを身にまとい、頭にはファッション性の高い帽子をかぶっていた。きちんと手袋をした両手はきつく握り締められ、目は見開かれ、ぞつとしている発見者たちをまっすぐ見上げていた。傷口とか流血とかはないように見えたが、顔面は腫れ上がり、暗紫色で、舌が歯の間からすこし突き出していた。どう見ても愉快的な光景ではなく、二人ともその死体を見て恐怖感に襲われた。

「女は死んでおります。間違いございません」ついに警官は言って、呼び子を吹いた。呼び子に答えるものがあつて、もう一人警官が現れた。

「絞め殺されたように見えるね」エラズビーはその発見に泡を食っていた。「顔面がすごい紫色だし、舌が突き出ている」

最初の警官がしゃがみ込んで、死体の首筋を見たが、暴力の痕跡は見つからず、首を振った。

「わかりませんです。奇妙な事件のようです。死体を病院へ運んで、先生方がどうおっしゃるか待ちます」

その一方で、もう一人の警官は助勢をもとめに行き、二、三分のうちに、警官がもう二人担架を持つて現れた。担架に死体が載せられ、最寄りの病院へ搬送された。

警官の求めに応じて、エラズビーは名刺を渡し、検死裁判の召喚に応じられるようにした上で、ゲルフ・ホテルへと立ち去った（ホテルは街路をほんのちよつと先へ行つたところだつた）。

ホテルに着くと、ブランドーをストレートで一杯飲んだ。目撃した恐るべき光景に気分が悪くなつたからである。彼は、苦悩に歪んだ美しい顔の幻影のせいで、その夜ずっと眠りを破られてしまつた。実際、それが一夜の楽しみの悲劇的結末だつた。